The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	グループ・ダイナミックスとボランティア研究
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1999, 25, p. 259-275
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10948
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

グループ・ダイナミックスとボランティア研究

渥　美　公　秀
（大阪大学人間科学部
ボランティア人間科学講座）

目　次

はじめに
1．グループ・ダイナミックス
2．ボランティア研究
3．グループダイナミックスの立場に立ったボランティア研究の例
おわりに

グループ・ダイナミックスとボランティア研究

渥美　公秀
（大阪大学人間科学部ボランティア人間科学講座）

はじめに

阪神大震災を契機として、ボランティアの大衆化が生じつつある。ボランティアが、人々の関心の一部となり、ボランティア活動に参加することは取りたてて奇妙で異質なことではなくなってきている。ボランティアは、様々な言説を通して大衆化していく。実際、ボランティアという言葉が、自発性、無償性、社会性といった言葉とともにメディアに登場することも多くなり、様々な行政施策や社会制度によってボランティアを既存の社会システムに位置づけようとする動きも随所に見られる。このような様々な実践を通してボランティアが大衆化しつつある。

確かに、ボランティア活動は実践に尽きる。しかし、実践に尽きるということは理論的な言説と一線を画すということでは、決して、ない。むしろその正反対である。ここに言う実践とは、Lewin（1951）が「よい理論ほど実践的なものはない」と語った時の実践であり、理論と不可分の関係にある実践である。例えば、ボランティアを特徴づける際に自発性・無償性・社会性といったキーワードを無反省に用いることによってボランティアを理解したことになるだろうか。ボランティアなる新しい現象が生じたからといって、旧来どおり現行の施策や制度を変容させることでその現象を社会に位置づけることができるのだろうか。ボランティアに関する研究が必要となる所以である。

本稿では、グループ・ダイナミックスの立場から、ボランティアを研究する人間科学の可能性について論じてみたい。まず、グループ・ダイナミックスの依って立つメタ理論を概説し、メタ理論のもとにおける理論、方法、実践について整理する（第１節）。次に、グループ・ダイナミックスの立場からボランティア研究の焦点を絞り出し、具体的な手順を検討する（第２節）。最後に、グループ・ダイナミックスの立場に立ったボランティア研究の例を紹介する（第３節）。具体的には、ボランティアが大衆化した社会における諸集団の振る舞いを集合的即興ゲームという切り口で検討する。次に、一人一人のボランティアに開ける世界を自発性、無償性、社会性といったキーワードの批判的吟味を通じて検討する。

1．グループ・ダイナミックス

グループダイナミックスは、集合の全体的性質（集合性）と個々の成員に開ける生活世界との動的相互規定関係を扱う学問である。集合性とは、社会的に構成された暗黙かつ自明の前提が通じる範域が有する性質であり、雰囲気なども１つの具体例である。個々の成員に開ける生活世界とは、個々の成員の内的世界のことではなく、個々の成員に表情を帯びて立ち現れる世界の様相のことである。集合性は、個々の成員によって作られるが、個々の成員は自らが構築した集合性に縛られるという動的相互規定関係が存在する。グループ・ダイナミックスは、この両者のダイナミックスについて探求する学問である。

グループ・ダイナミックスは、「研究者と研究対象との間に一線を画すことはできない」ということを公理とし、「よい理論ほど実践的なものはない」(Lewin、1951）という姿勢を堅持しながら研究を進めていく。本節では、グループ・ダイナミックスを支えるメタ理論と、そこから導出される理論、方法、および、実践について整理しておこう。

グループ・ダイナミックスは、メタ理論として、広義の社会的構成主義（social constructionism）の立場を採り、従来の主観－客観図式と訣別する。すなわち、グループ・ダイナミックスは、世界を社会的に構成された産物だとして理解する。これまでの科学は、一方に外在的に実在する世界（外界）を措定し、他方に外界が投影され意識作用・情報処理が行われる内界を対置し、内界－外界、あるいは、主観－客観、二項対立図式を採用してきた。しかし、今世紀に入って主観－客観図式は科学の行き過ぎや行き詰まりと相俟って省察を迫られてきた。現在では、哲学の分野で主観－客観図式を根本的に超克する試み（例えば、廣松、1982）が成功しているし、臨床心理学の領域でも主観－客観図式を超えた療法が事例とともに知られるようになっている（例えば、McNamee & Gergen、1992)。グループ・ダイナミックスに近い社会心理学の分野でもヨーロッパから Moscovici（1984）による社会的表象理論の提唱がなされ、アメリカからは、Gergen（1985、1989）による社会心理学批判が相次ぎ、今や主観－客観図式を超克しようとする試みは１つの潮流となりつつある。社会心理学における最近の成果としては、Gergen（1994）による論理実証主義心理学の批判とそれに代わる社会的構成主義による社会心理学の建て直しの提唱が強力である。これら諸分野での試みは、それぞれ強調点を異にするとしても、広義の社会的構成主義への動きとして一括することができよう。グループ・ダイナミックスは、このような関連諸分野での動きと連動して、社会的構成主義をそのメタ理論として採用する。その結果、グループ・ダイナミックスは、客観的事実についての理論を実証的方法で検討するという論理実証主義的研究スタイルを棄却する。理論の価値は、実在すると想定される客観的事実を描写することにあるのではないと考える。そして、研究は価値中立的ではありえず、研究の成果としての知は、時代を超えて蓄積されたりはしないという立場を採る。

グループ・ダイナミックスでは、理論、方法、実践も自ずと従来の論理実証主義を基盤とした理論・方法・実践とは異なる。従来は、理論によって現実のベールを剥がし、できるだけ真実に近い事柄を明らかにしようとしてきた。理論は、外在的現実を覆うベールをどれだけ剥がすことができるかという基準で評価され、外在的現実との照合が上手く進む理論がよい理論とされた。しかし、グループ・ダイナミックスでは、理論のもつ生成力（Gergen、1994）によって理論を評価する。グループ・ダイナミックスにおいて「よい理論ほど実践的なものはない」と言う際の「よい理論」とは、生成力をもった理論である。すなわち、社会の前提そのものを疑い、現代の社会生活そのものを疑い、「当たり前」とされていることを疑い、そして、その結果、社会の中に新鮮な代替案を生み出す能力をもった理論である。優れた理論とは、外在的現実（なるもの）との照合によって成立するのではなく、抽象的な言説形式をとる生成的理論として、「表現力を与える」事例をもって例証され、新たなる実践を生成する理論でなければならない。

理論を生成力で評価していては、理論による予測や制御は不可能になるのではないかという危惧があるかもしれない。言うまでもなく、グループ・ダイナミックスでも予測や制御は重大な問題である。しかし、予測や制御といっても、外在的現実を措定し、その現実を予測したり、制御したりするのではない。まずは、予め予測したい結果や、制御の結果得たいと考える現実が構想される。そして、先取りされた予測・制御結果に向けて、現在を、いや、過去をも構成していくのである。言い換えれば、実践の現場においてこうあってほしいという価値観が先に存在する。そして、その目標に向かって現実を様々な言説を通して社会的に「でっち上げる」のである[1)]。夢は一人で見ているうちは夢であるが、二人で見れば現実となる。

グループ・ダイナミックスでは、理論と不可分の関係にある方法も従来の方法とは異なる。従来は、外在的に存在する世界が措定され、理論と外在的世界との照合を首尾よく行うことが目的であったから、これを可能にする方法が用いられる必要があった。すなわち、実験に代表されるような論理実証主義の方法である。しかし、社会的構成主義の立場に立って、生成力によって理論の優劣を定めようとするならば、理論の例証となる表現力をもった事例を提示できるような方法が必要となる。そのためには、当事者の構成された現実にどっぷりとつかりながら、かつ同時に、その現実から離れて研究者の構成された現実に自らをずらし、相異なる構成的現実からこそ見えてくる世界を把握することが必要となる。具体的な方法としては、参与観察が有力である。もちろん、アンケート調査や実験的方法が無駄であるとか意味がないというのでは決してない。アンケート調査や実験的方法が、理論の検証として用いられる限りにおいてこれを棄却し、理論の例証を提示する限りにおいてこれを採用する。参与観察では、研究者の構成された世界と当事者の構成された世界とがぶつかりあう間（はざま）において展開する言説のせめぎあいが生じる。研究者は、その言説の交流を記述していく。

研究成果としての記述は、様々な形態をとる。理論として抽象的な言説が語られ、実

践として具体的な言説が語られる。淡々とした記述から、小説のように人々の生きざまを鏤々綴っていくという形態もある。記述されたものはエスノグラフィーと呼ばれる場合が多い。ただし、インフォーマントからできるだけ有効に情報を入手し、その情報に基づいて客観的に記述するというスタイルではない。このようなスタイルでは、インフォーマントが“真なる”現場を独占的に知っているという構成を厳密には免れないからだ。したがって、グループ・ダイナミックスの記述は、著者自身が織り込まれたエスノグラフィーとなる。その結果、グループ・ダイナミックスの研究成果は、論文というより作品と呼んだ方がふさわしい形態をとる。作品としてのエスノグラフィーは、常に改訂作業に開かれている。研究は実践と不可分であるからである。

グループ・ダイナミックスにおける実践とは、研究者と当事者の言説が変貌を遂げる場のことである。研究者も現場の当事者もそれぞれの社会的に構成された世界に住む。もちろん、研究者の世界と当事者の世界は異なる場合が多い。ただし、研究者が何らかの基底的・原理的な知識を独占し、研究者にとって外在する当事者の世界に対峙するのではない。また、当事者だけが真なる現場を知っていて、研究者は当事者にとって外在的に関与するのでもない。互いに相異なる世界に住みながら、互いの言説を交差させ、互いの世界に変化をもたらす。実は、この変化が実践なのである。グループ・ダイナミックスが「よい理論ほど実践的なものはない」というのは、「生成力のある理論であるほど、変化＝実践が生じる」という意味である。したがって、グループ・ダイナミックスの理論や研究成果としてのエスノグラフィーは、実践と相俟って不断に改訂されていくことになる。

エスノグラフィーは、改訂作業に開かれているだけではなく、一般化に対しても開かれている（杉万、1998）。エスノグラフィーは、抽象度を上げることによって一般性を確保し、より広い領域での実践と結びつく。エスノグラフィーは、研究者と当事者とで織り成す言説であるが、通常、時間的にも空間的にも局所的であり特個的である。エスノグラフィーは、そこに含まれる理論が真理を突いているから一般性を持つのではない。また当事者の経験が活き活きと綴られているから一般性を持つわけでもない。抽象化された言説＝理論であってこそ、時間的・空間的に離れた世界にも影響する。このようにして導かれた研究結果＝実践結果は、現場とは直接に関係をもたない人々の解釈共同体に流れ込む。そこで真実味・迫真性をもって迎えられれば、それをもって生成力のある研究成果となるのである。

グループ・ダイナミックスは、社会的構成主義というメタ理論を採用し、生成力のある理論を参与観察という方法によって例証しながら、現場と言説の交流を進めて行く。現場に持ち込んだ言説が当事者の活動に変化をもたらす場合もある。当事者との交流によって理論的言説が修正を迫られることもある。現場との交流によって理論が絶えず改訂されて行くプロセスこそがグループ・ダイナミックスの研究であり、実践と呼ばれるプロセスである。

2．ボランティア研究

グループ・ダイナミックスの立場に立ったボランティア研究は、ボランティアという集合の全体的性質（集合性）と個々のボランティアに開ける生活世界の動的相互規定関係を記述する。例えば、ボランティアを含む社会全体の性質とボランティア活動に携わる人々に開ける世界がどのように互いに規定されているかという問題に取り組む。このようなボランティア研究では、生成力をもった理論と参与観察を中軸とした方法によって現場との実践を積み重ねていくことになる。最終的には、研究者自身を織り込み、かつ、理論を含んだエスノグラフィーが提出されるが、このエスノグラフィーは常に改訂作業に開かれている。研究は、理論・方法・実践というどの切り口からスタートしても構わないが、本節では、ボランティア研究における生成力のある理論の構築、参与観察法、現場との交流の順に整理しておこう。

Gergen（1994）は、生成的理論を構築し、発展させるための手だてとして、次の4つの方略を紹介している。すなわち、①少数意見を明示化し、新たな文脈に置くこと、②常識的枠組みを極端に拡張すること、③アンチテーゼの探求、④新しいメタファーを利用すること、である。それぞれ一般に「当たり前」だとして前提されている事柄を疑ったり、極端に拡張したりすることによって、暗黙かつ自明の前提を暴こうとする方略である。例えば、ボランティア研究においては、「自発性」のようにボランティアを特徴づけるとされているキーワードを疑ってみたり（渥美、1998c）、ボランティア活動を音楽に喩える（渥美、1998a）など、一見突拍子もないことから始めて、理論的な準備を図ることがこれにあたる。

次に、研究者は、ボランティア活動の現場に参与観察を行う。すなわち、現場にいる時はボランティア、あるいは、ボランティア団体の構成員としてそこに構成される世界に住む。研究室に戻った時は、研究者として構成された世界に住む。ここにボランティアとしての言説と研究者としての言説が出会う。ボランティアの当事者が構成する世界に立たされて研究者としてどのような言説が吐けるか、研究者の構成する世界に立って、ボランティアとして（研究者なりに）どのような言説が吐けるかが試される。その際、研究者がボランティアの当事者に媚びるのは見苦しいのと同様に、ボランティアが研究者に阿る必要は全くない。このプロセスを書き留めた記述として研究者自身を含んだエスノグラフィーが完成する。

研究者がボランティア活動の現場に持ち込む言説は理論と理論に基づく研究者を含んだエスノグラフィーである。理論がボランティアの構成する現実に変化をもたらす場合、それは生成力のある理論となる。逆に、ボランティアの構成する現実によって研究者の構成する現実が変わるという意味で理論は常に開かれている。理論とエスノグラフィーの改訂作業に自覚的・自省的に関与していくのが研究者の役目である。

3．グループ・ダイナミックスの立場に立った ボランティア研究の例

筆者らは、以上述べてきたグループ・ダイナミックスの立場に基づいて、これまで阪神大震災の避難所（e.g.，渥美・渡邊、1995；杉万・渥美・永田・渡邊、1995）やボランティア組織(e.g.，渥美・杉万・森・八ッ塚、1995；渥美・森、1996；Atsumi, Watanabe, & NVNAD、1998）の研究、アメリカの災害ボランティア組織の研究（e.g.，鈴木・渥美、1998)、および、コミュニティにおけるボランティア活動（渡邊・渥美、1998；Watanabe, Atsumi, Teramoto, & Komura、1999）に関する研究を実施してきた。理論研究としてもボランティアを含む社会の行方について試論（渥美、1998a）を開始している。ここでは、個々の研究で関与した現場のエスノグラフィーを書く余裕は残されていないので、最近取り組んでいる議論を中間報告的に紹介する。まず第1に、ボランティアを含む社会という集合全体の動きをボランティアを含む諸集団の振る舞いに焦点を当てて考察する。具体的には、災害ボランティア活動の観察から得た着想をもとに「集合的即興ゲーム」に関する考察を行う。これは、新しいメタファーを導入しながら生成的な理論を構築する試みである。第2に、ボランティアを含む社会に生きる個々のボランティアに開ける生活世界について、考察の糸口を提示する。具体的には、ボランティアとは何かというあからさまな問いに対して頻繁に挙げられるキーワードを疑ってみる。これは、アンチテーゼを探求しながら、生成的理論を構築する試みである。

(1)ボランティア社会における諸集団の振る舞い[2)]

本節では、阪神大震災や日本海重油流出事故における災害ボランティア活動の観察（e.g.，渥美、1995；渥美・杉万・森・八ッ塚、1995；小村、1997）を通して見られた災害救援システムの特性をヒントに、「集合的即興ゲーム」理論の準備を図る。

災害救援の現場では、安定した超越性・規範が消失し、ジャズのような「即興」[3)]が生じている。ただし、ここでは日本語の「即興」という言葉から連想されがちな「場当たり」とか「思いつき」による災害救援を述べようとするのでは決してない。即興とは、超越的規範が遠のいた時に、さらなる抽象化の運動とともに、その場その場の状況に応じて、一時的な超越性を生成・更新し続ける過程を指す。

即興では、ルールが刻々と変化する。例えば、子供たちの草野球では、集まった人数が少ない場合などに、三角ベースにしたりして、人数の不足を補う。さらに人数が減ると攻撃側の子どもがキャッチャーとなって、キャッチャーフライは無効といったルールを新たに創り出す。即興には、こういった意味でのルールの生成・更新が伴う。

災害救援と即興との対比を、やや詳しく整理してみよう。まず第1に、災害救援には、大筋でのストーリーはあっても、事の詳細を記したシナリオはない［固定したシナリオの不在］。発災直後から、人命救助を中心とする救急救命期、水・食料といった最低限

の物資が必要となる緊急期、避難所等に入った被災者に対する救援物資や様々なケアの必要となる救援期、ライフラインが復旧していく復旧期、地域の復興に向けて動き出すとともに、被災者に対する息の長いサービスが要求される復興期といった大筋の展開は、災害毎に、ある程度共通である。しかし、各時期における活動内容には、その時々の参加者が臨機応変に対処すべき事柄が多く、予め、すべてを計画するのは不可能である。

第2に、災害救援では、参加する諸組織・個人が、災害救援に関する情報や技術を持っている必要がある［参加者の実力への依存］。行政機関は、周到な防災計画の整備とその適用を求められる。企業は、被災地の現状に応じた人材・資材・資金の投入が期待される。また、ボランティア団体は、ボランティア活動に参加する人々を受け付け、活動場所を紹介するだけでなく、参加者の安全確保や撤退時期にも通じている必要がある。個人ボランティアも、どこに行けばどのような活動に参加できるかといった情報をもつ必要が出てくる。

ただし、ボランティアは、災害に関する情報や知識という「実力」だけでなく、「何が危険かわからない」危険を既存システムの外で見つめる実力をも併せ持つ必要がある（渥美，1998b）。例えば、平常時に地域の防災力を高めるために防災計画を周到に準備する行政システムに対し、“防災を唱えない防災”と題した地域活動を展開している事例（Watanabe, et al. 1999）などは、既存システムの外部から災害救援・防災に取り組むボランティアの実力を示す一例である。

第3に、災害救援では、参加する諸組織・個人が、全体の“間”を考慮しながら、活動していく必要がある［“間”の重要性］。要求されるのは、自他の活動を理解しながら、即興が行われている場全体をも同時に理解することである（清水、1996）[4]。個々の参加者に関する情報と、場全体に関する情報が揃った時にはじめて、活動の重複を避けたり、活動の欠けている部分を補い合うことができ、効率的、効果的な救援活動が可能になる。逆に、どちらかの情報が欠ければ、文字通り「間の抜けた」救援活動になってしまう。

第4に、災害救援は、被災者と一体となった活動である［対象との不分離］。災害救援では、被災者のニーズと乖離した活動には意味がない。ボランティアが救援する側であり、被災者は救援される側だという固定観念があるとすれば、それは害こそあれ互いにとって益とはならないことはすでに指摘されている（e.g., 野田、1995）。なぜなら、災害救援は、被災者とボランティアを含む集合性の再構築支援（渥美、1996）だからである。また、被災地の復旧が進み、被災地住民による自力復興の兆しが見え始めた場合には、それまでの救援活動を、被災地住民に引継ぐことを考えなければなるまい。

第5に、災害救援においては、コーディネーターが必要である［演出家の必要性］。ただし、コーディネーターは、固定している必要はない。個々のニーズに応じて、次々とコーディネーターが代わっていく。現に阪神大震災の被災地では、数多くのボランティアコーディネーターが生まれては消え、消えては生まれることが繰り返されてきている

(e.g., 八ッ塚・矢守, 1997)。ただし、コーディネーターは、ボランティアと被災者のニーズとをつなぐだけではない。災害救援の現場に参加するあらゆる団体・組織のコーディネートをもその射程に入れておくことが必要である。

最後に、災害救援では、平時に顔の見えるネットワークを維持しておくことが必要である［本番以外の場の重要性］。緊急時ではない時に、参加者どうしが気心の知れた関係を築いているか否かによって、救援の展開や深みに差が生じる。災害救援に参加する行政、企業、そして、ボランティア組織が、平時から情報交換を行い、互いの長所や短所を知り合っていることによって、緊急時には、迅速な救援活動が可能となる。実際、1998年に北関東・南東北で発生した水害では、現地のボランティア組織と連携していた兵庫県のいくつかの組織が迅速に対応した（日本災害救援ボランティアネットワーク、1998)。

集合的即興ゲーム

災害救援の現場から得た即興という着想をもとに、超越的規範が一時的にせよ消失した後の人々が織り成す集合性が帯びる様相をより一般的に考察する。ここで考察する事態には、規範や制度という安定した超越性は消失していて[5]、その場その場で超越性を局所的に仮構してはそのもとに立ち現れる多様な選択肢を臨機応変に選択している事態である。仮構されては消滅し、再び仮構されていく規範、いわば、この生生流転する規範＝超越性を、ここでは、安定した超越性とは区別して＜超越性＞と記す。

＜超越性＞のもとでは、行為の基盤となる選択肢の束が生生流転する。＜超越性＞のもとでは、偶有性は極度に多様化し、行為の根拠は泡沫のごとく消失する。＜超越性＞が持続するとすれば、行為に引き続き新たな行為が生じるということ、ただこれだけに依っている。行為者の視点に依拠して言うならば、＜超越性＞のもとでは、行為は、何らかの究極的な目標に到達するか否かという基準によって行われるのではない。ただ単に行うのである。その行為に次の行為が接続すれば、当該の行為が意味を帯びる。

ところで、＜超越性＞は（もちろん、超越性も)、行為の妥当・非妥当を指し示す操作に基盤を与える。妥当・非妥当の区別の集合を、ルールと呼んで動的性質をつかんでおこう。生成・更新されていくルールは、複数の人々（集団・組織等）に担われる（即興の集合性)。ルールを取り巻く行為の集合をゲームという（即興ゲーム)。以下では、このように＜超越性＞が生生流転する事態における諸集団の振る舞いを「集合的即興ゲーム（Collective Improvisation Game)」と呼ぶ。

集合的即興ゲームは、Carse（1986）のいう無限ゲームと親近性をもつ。Carse によれば、有限ゲームでは勝つことが目的になるが、無限ゲームでは、ゲームを継続すること自体が目的となる。無限ゲームでは、勝負がついてゲームが終了してしまうこと（有限性）にプレイヤーが気づけば、ゲームの途中でルールを変更する。有限ゲームは、ルールという境界の内側で遊ぶこと、すなわち、安定した超越性の範域で行為が進展することに対応している。一方、無限ゲームは、ルールという境界とともに遊ぶこと、すなわ

ち、超越性を生生流転させることに対応している。Carseによれば、有限ゲームのプレイヤーは真面目であるのに対し、無限ゲームのプレイヤーは遊び心を持っている。集合的即興ゲームでも、参加者は、生真面目にルールの厳守を心がけるのではなく、むしろ遊び心をもってルールを変更する。このようにルールとしての＜超越性＞が生生流転する事態における諸集団の振る舞いが集合的即興ゲームである。

集合的即興ゲームが始動するのは、安定した超越性が遠のき、安定したルールが消失した時である。集合的即興ゲームのルールは、＜超越性＞に支えられ、一定不変ではない。集合的即興ゲームの継続には、次々と行為が連続していくことが求められる。したがって、集合的即興ゲームでは、行為が断絶する事態に即応的に次の行為を接続しなければならない。行為が断絶する事態を見極めて行為を接続していく能力と、接続のタイミングが問題となる。つまり、自他の活動を理解しながら、即興が行われている場全体をも同時に理解することが必要になる。集合的即興ゲームの進行をある時点で止めてみれば、次々と産み出される＜超越性＞は、具象的な身体に担われている。この身体が(その瞬間での）コーディネーターである。無論、その場その場で＜超越性＞が仮構されるとしても、その論理構成は、安定した超越性のそれ（大澤、1993）と同じである。

「集合的」即興ゲームの要素は、ゲームの継続に寄与するかどうかという基準によって決まる[6]。ゲームの継続に寄与するものは要素の集合に入り、そうでないものは集合に属さない。実際、現在のボランティアの集まりを観察していると、タスクに応じてメンバーが意外なほど柔軟に交代していく。参画するメンバーがそもそも流動的であり、途中での入れ替わりも多い。従来の組織でも組織の境界は変動するが、ボランティアではそれが顕著である。

集合的「即興」ゲームは、そのプロセスをゲームの進行と同時に同定することが不可能であり、観察者が時間をずらして観察して初めて特定される。例えば、A_t（時刻tにおける行為A)、A_{t+1}、A_{t+2}において、A_{t+2}が産出されたとたんに、A_tとA_{t+1}が接続し、以下、これの繰り返しとなる。A_{t+2}を産出できなければ、A_{t+1}は孤立した異物になり、A_{t+2}を産出した場合にのみ、Aという一連の行為が意味を帯びるという構成である。ボランティア達は、実に多様な活動を行うが、その場その場では、行為の意味が特定できない場合がある。しかし、観察時間のずれを利用して、後から特定することは可能である（e.g., 渥美、1997)。

集合的即興「ゲーム」を演じている当事者は、ゲーム内部でルールを完全に知ることはない。集合的即興ゲームは、「観察者から見た時」、そのつど＜超越性＞を産出しているように見える。しかし、「当事者の視点から見た時」、根底にルールなどというものはない。「ただ活動している」のである。

以上の特徴を踏まえて、集合的即興ゲームを関数で表現するとすれば、f_t（ , , , ,.....）という形式になる[7]。これは、時刻tにおいて、変数の定まらない関数であり、数学的には（今のところ）記述不可能である。しかし、変数は、ラン

ダムに決まるのではない。集合的即興ゲームを観察する時間をずらし、三項一組の関数を導入すれば、何が構成要素だったかということは後から理解可能であるし、そのような関数が記述できる可能性があろう。

振り返ってみれば、集合的即興ゲームは、何もボランティアを含む社会に限った運動ではなく近代化を遂げた多様な社会における日常生活に点在する運動だとも言える。「即興」という言葉から、安易にいわゆる「差異の戯れ」論議だとするのは早計である。ただし、ここでは、局所的に展開する複数の集合的即興ゲーム間の関係、同時進行している抽象化の運動と集合的即興ゲームの安定性との関係、集合的即興ゲームと感情との関係の精緻化、といった点はまだ論じられていない。無論、数学的な定式化は将来の話である。以上の議論は、今後、生成力をもった理論を構築していく際の最初の一歩と位置づけたい。

(2)ボランティアに開ける世界[8)]

前項で、ボランティアは「ただ活動している」と述べた。昨今のNPO/NGOを近代社会論、社会運動論に対応づけながら論じた三上（1998）も最近のボランティア活動に「やりたい時にやりたい事をすればよい」という特徴が見られることを指摘している。実際、ボランティア活動をしている人に、「なぜボランティアをするのか」といった問いを発すると、「ただボランティアの現場があったから」という答が返ってくる場合がある（中田・内海・渥美・早瀬・大熊、1998）。当事者として当然の答である。

ところが、ボランティアを特徴づける際には、「ただ活動している」あるいは「やりたい時にやりたい事を」といった側面が抜け落ちているような言説が見られる。例えば、ボランティアの特性として「自発性」、「無償性」「社会性」といった言葉が使われる場合がある。これらの言葉を無反省に使う時、その背後には、暗黙かつ自明の前提として、近代社会の価値や道徳性といった常識が潜んでいるように思われる。「ボランティアは、自発的に、無償で社会的に活動する」といった表現の中に、新しい市民社会を担う主体（の１つ）として自律した個人なる“理想像”を夢見たり、自発的に社会に貢献すべきであるとの“道徳観”を持ち込む姿勢が見え隠れする。そこにある種の“軽さ”やおめでたい気配、あるいは、陰湿ささえ感じ取るのは筆者だけであろうか。これらのキーワードを文字どおりとれば、「ただ活動している」とするボランティア像とはかけ離れているし、実際、ボランティア活動の場に参加している実感ともずれている。本節では、このずれの感覚を手がかりに各々の言葉を疑ってみよう。

自発性：「みずから進んで行なうこと」と「自然に起こること」という似て非なる意味がある。ボランティアの自発性という場合、通常は、「自己の内部の原因・力によって思考・行為がなされること」として前者を指すようである。しかし、ボランティアの自発性という場合に確固とした“自己”なるものを（勝手に）前提し、そこから発する意志によって参加するとするには無理がある。木村（1988）が考察しているように、

「自」という字には、本人の意志の含まれる「みずから」という訓だけではなく、本人の意志を含まない「おのずから」という訓がある。ボランティアの背後には、「おのずから」がありはしないか。ボランティアの現場に立つ人物が「ほっとかれへん（ほうっておくわけにはいかない）」と表現していること（早瀬、1996）も、このことを示している。

無償性：無償の反語は有償である。この言葉は、ボランティアを有償の否定として捉えている。言い換えれば、交換可能性という平面＝市場論理の平面での議論になっている。しかし、ボランティアは、交換とは端的に無縁ではなかろうか。交換可能性の平面から、交換とは無縁の「かけがえのない」平面に再文脈化するのである。言うまでもなく、交換が成立するためには、予め暗黙かつ自明の前提が共有されていること、すなわち、同じ超越性の範域に含まれていることが必要である。しかし、前節で述べたように、＜超越性＞は生生流転し、ボランティアは既存の範域から絶えず逸脱する。したがって、ボランティアとボランティアの受け手（あるいは、評価者）との関係は、交換ではなく贈与の関係にある。実際、日本海重油流出事故の際、「ただ（無償）であるから参加している」と述べたボランティアがいた。彼の言葉は、「ただ（無償）だけれども参加している」ではない。ここには、交換可能性がないことにこそ活動の意義を見ている姿がある。

社会性：ボランティア活動は、何らかの形で他人と関わり、“一人遊び”ではないということを表している。これは当然のことであろう。しかし、この観点からの議論は、ついつい、“従って”ボランティアが新しい市民社会の担い手になる可能性があるとか、“それゆえに”新しい公共空間が創出されるといった議論につながる場合がある。しかし、「ただ活動している」ボランティアは、市民社会や公共性を“目標”とした活動に携わっているのだろうか。そもそも社会性は、あらゆる事柄の前提でもある。

では、「ただ活動している」というボランティアが、なぜ大衆化していくのだろうか。もはや詳論する紙幅は残されていないが、近代社会の黄昏というボランティア社会全体の背景（e.g., 21世紀の関西を考える会、1997）を射程に入れて考えるならば、個々のボランティアには、有用性の彼方に開ける「歓び」の世界が展望される。ボランティアは、バタイユのいう「呪われた部分」(Battaille、1949）が消失し、有用性を越えた彼岸への扉が開かれることと関係があろう。すなわち、公共性のためとか、経済効果が上がるとかいったことに対する何らかの有用性を備えた手段としてではなく、それ自体として生の充溢であり、歓喜であるような領野がボランティア一人一人に開ける[9]。この領野において、「かけがえのなさ」を感じる（１つの）活動がボランティアである。ボランティア社会には、近代社会の価値を超えた新しい生のあり方が垣間見えるように思われる。

おわりに

研究者の仕事は、問題の解決ではなく、問題の発見である。通常は「問題などない」、あるいは、「うまく隠蔽されていて問題が見えない」場面に対して、問いを立てることが研究者の役目である。そして立てた問いに対して、理論を構築し、例証を重ねていくことが研究者の行う作業である。このような作業に基づいて、実践に携わる人々に対して通訳可能な言説を吐き、彼らとの双方向的な対話を通して、理論をバージョンアップしていく。そこに真理ではなく、真実味と迫真性（Bruner、1998）が伴ってくれば、理論の準備は整いつつあるといえよう。本稿を、現場との交流を継続し、絶え間なくバージョンアップしていくための第一歩と位置づけておきたい。

注

1）日本グループダイナミックス学会第46回大会（1998）におけるワークショップ「グループ・ダイナミックスの方法論－“もう一つの科学”に向けて（企画者：杉万俊夫）」で交わされた議論が参考になったことを明記しておきたい。なお、本節の行論は、杉万（1998）およびそれに関する著者との度重なる議論を参照している。
2）渥美（1998a；1998c）をもとに加筆した。
3）即興とジャズとの関係では、Berliner（1994）や Sadnow（1978）が参考になる。
4）清水（1996）は、この事態を自己中心的自己と場所中心的自己とのバランスの重要性として論じている。
5）安定した超越性の消失については、渥美（1998a）参照。
6）要素の曖昧さを根拠とし、メンバーシップ関数を設定するファジイ集合論とは異なる（河本、1997）。
7）オートポイエーシスシステムと同型である。河本（1995）参照。
8）渥美（1998c）をもとに加筆した。
9）見田（1996）は、情報化・消費化された現代社会を、情報、消費に関する原理的な問いから考察し、同様の見解を提示している。

参考文献

渥美公秀（1995）ボランティアを組織するボランティア－阪神・淡路大震災における西宮ボランティアネットワーク（NVN）の事例－*Business Insight* 10, 108－125.

渥美公秀（1996）これからの災害救援：被災者・救援者の集合性に基づいた集合性再構築支援　城仁士・杉万俊夫・渥美公秀・小花和尚子編著　*心理学者が見た阪神大震災－こころのケアとボランティア*　ナカニシヤ出版　192－216

渥美公秀（1997）広域ボランティア組織の長期的展開－西宮ボランティアネットワークから日本災害救援ボランティアネットワークへ　神戸大学震災研究会編　*阪神大震災研究2　被災の苦難とボランティア*　神戸新聞出版センター　287－300

渥美公秀（1998a）ボランティア社会の行方　*組織科学*, 31, 3, 27－35.

渥美公秀（1998b）災害救援システムとボランティア活動の将来展望　*都市政策*，92，17－28.

渥美公秀（1998c）ボランティア社会に向けて：理論的準備(1)　*日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

渥美公秀・森永壽（1996）NVN－成立過程とその後の展望　朝日新聞社編　*阪神・淡路大震災誌*　朝日新聞社　415－421

渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・八ッ塚一郎（1995）阪神大震災におけるボランティア組織に関する参与観察研究　*実験社会心理学研究*35，2，218－231.

渥美公秀・渡邊としえ（1995）避難所の形成と展開－西宮市安井小学校　神戸大学震災研究会編　*阪神大震災研究Ⅰ　大震災100日の軌跡－被災、避難、困窮、そして復興へ－*　神戸新聞出版センター　82－90

Atsumi, T., Watanabe, T., & NVNAD (1998) The History of the NVNAD. *The 7th Annual VOAD Leadership Conference*. Atlantic City, NJ.

Battaille, G. (1949) La part maudite. Paris : Les Editions de Minuit. 生田耕作訳　*呪われた部分*　二見書房　1973.

Berliner, P. F. (1994) *Thinking in jazz : The infinite art of improvisation.* Chicago, IL : The University of Chicago Press.

Bruner, J. (1986) *Actual minds, possible worlds.* Cambridge : Harvard Univ. Press. 田中一彦訳　可能世界の心理　みすず書房　1998.

Carse, J. P. (1986) *Finite and infinite games.* New York : Macmillan.

Gergen, K. J. (1985) The social constructionist movement in modern psychology. *American Psychologist*, 40, 266－275.

Gergen, K. J. (1989) Social psychology and the wrong revolution. European Journal of Social Psychology, 19, 731－732.

Gergen, K. J. (1994) *Toward transformation in social knowledge* 2nd ed. London : Sage. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀監訳　もう一つの社会心理学　ナカニシヤ出版　1998.

早瀬　昇（1996）*大阪大学人間科学部公開講義*

廣松　渉（1982）*存在と意味*　第一巻　岩波書店

河本英夫（1995）*オートポイエーシス*　青土社

河本英夫（1997）オートポイエーシスと認知の機構　*日本ファジィ学会誌*　9，629－636.

木村　敏（1988）*あいだ*　弘文堂

小村隆史（1997）「ナホトカ号」重油流出災害に防災ボランティアの新しい形を見た－「重油災害ボランティアセンターの48時間」　*近代消防*　3月号2－11.

Lewin, K. (1951) *Field theory in social science : Selected theoretical papers*. New York : Harper & Brothers. 猪股佐登留訳　社会科学における場の理論　誠信書房　1956

McNamee, S. & Gergen, K. J. (1992) *Therapy as social construction*. New York : Sage. 野口裕一・野村直樹訳　1997　ナラティブ・セラピー：社会構成主義の実践　金剛出版

三上剛史（1998）新たな公共空間　*社会学評論*，48，453－473.

見田宗介（1996）*現代社会の理論－情報化・消費化社会の現在と未来*　岩波新書

Moscovici, S. (1984) The phenomenon of social representations. In R. Farr & S. Moscovici (Eds.). *Social representations*. Cambridge : Cambridge University Press.

中田武仁・内海成治・渥美公秀・早瀬昇・大熊由紀子（1998）国際協力とボランティア　*大阪大学人間*

科学部紀要，83－106.

日本災害救援ボランティアネットワーク（1998）*NVNAD－News* Vol. 19.

21世紀の関西を考える会（1997）*到来しつつあるボランティア社会を前提とした災害救援システムの実現に向けて*

野田正彰（1995）*災害救援* 岩波書店

大澤真幸（1993）*身体の比較社会学 I* 勁草書房

Sadnaw, D.（1978）*Ways of the hand*. Cambridge, MA : Harvard University Press. 徳丸吉彦・村田公一・卜田隆嗣訳 *鍵盤をかける手－社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門* 新曜社 1993

清水 博（1996）*生命知としての場の論理－柳生新陰流に見る共創の理* 中公新書

杉万俊夫（1998）グループ・ダイナミックスの方法論－「もう一つの科学」に向けて *日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

杉万俊夫（1998）実践としてのグループ・ダイナミックス *実験社会心理学研究*、38，202－204

杉万俊夫・渥美公秀・永田素彦・渡邊としえ（1995）阪神大震災における避難所の組織化プロセス *実験社会心理学研究*，35，2，207－217.

鈴木勇・渥美公秀（1998）アメリカにおける災害ボランティア組織の変容過程－ノースリッジ地震の事例 *日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

渡邊としえ・渥美公秀（1998）阪神大震災における地域変容過程のフィールド・ワーク－複合的変容の可能性 *日本グループ・ダイナミックス学会第46回大会発表論文集*

Watanabe, T., Atsumi, T., Teramoto, H., & Komura, T.（1999）Preventing disaster without saying disaster prevention : A case study "Workshop for Rediscovery of My Home Town." The 6th Japan－US Workshop for Urban Disaster Kobe.

八ッ塚一郎・矢守克也（1997）阪神大震災における既成組織のボランティア活動－日本社会とボランティアの変容 *実験社会心理学研究* 37，177－194.

Group Dynamics and Volunteer Studies

Tomohide ATSUMI

The present study discusses possibilities for group dynamics to investigate volunteer activities. First, I introduce a meta–theory of group dynamics, i.e., social constructionism, under which the significance of theory, method, and practice is deliberated. Second, discussion brings procedures of group dynamics approach to volunteer studies into focus. Finally, two studies exemplify the approach : One calls attention to the group–level behavior of volunteers taking a new concept–collective improvisation game–into account, while the other throws doubt upon circulated keywords of volunteers in order to examine the nature of life–world emerged to individual volunteers.